

|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | 「人間疎外」の観点からなされるマルクス解釈への疑問  |
| Sub Title        | Some questions to Marx-interpretation as a philosopher of Estrangement of human beings   |
| Author           | 三浦, 和男(Miura, Kadzuo)  |
| Publisher        | 三田哲學會  |
| Publication year | 1963   |
| Jtitle           | 哲學 No.43 (1963. 1) ,p.65- 86   |
| JaLC DOI         |  |
| Abstract         | I have been greatly sceptical of the trend that tries to interpret Marx as a philosopher of "estrangement." This and the following series of theses are the one which aims to answer the questions given rise to through this interpretation, by making clear, I hope, the true point of view of young Marx and criticizing some representatives of this trend. In this paper was presented the first two parts of the series. The first is the general introduction to the whole; in that I have brought out some problematic points and thereby given an outline of the subjects I will deal with. In the second I have tried to explain one important phase of the method used in the "German ideology, (1845-6)" the phase, namely the point of view which takes human beings as-so to speak-an absolute axis of the history. to be continued. |
| Notes            |  |
| Genre            | Journal Article  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000043-0065">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000043-0065</a>  |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「人間疎外」の観点からなされる マルクス解釈への疑問

三 浦 和 男

## 一 一般的緒論

いわゆる「哲学者」のがわからマルクスの思想にむかつて<sup>アプローチ</sup>接近がおこなわれてゆくばあいには、なかんずく最近において、かれを「人間疎外」の哲学者、「疎外の克服」を目標にかかげた思想家としてもつばら解釈するような傾向が、支配的でないまでも、ともかくかなり有力な地位をしめてきたことは、あらそいがたい事実であるとおもわれる<sup>1</sup>。その意図とするところは、マルクスを<sup>フアツハ ヴァイゼンシヤフトラー</sup>専門家的個別科学者としてでなく、むしろ「思想家」として救済しようとする点にあるようにみえる。つまり、唯物史観にせよ、経済学研究にせよ、その背後には人間の自己疎外の克服という秘められた基本線、ヒューマニスティックな動機がどこまでも存しているのであつて、ここにこそマルクスの「思想家」たるゆえんが存しているのだから、その点を克明に探索することこそ肝要だというのである<sup>2</sup>。もちろんのことではあるが、このような主張をなすひとびとのあいだには、相互にかなりの程度の距たりがあるのであるから、それらを一括してひとつの傾向にまとめてしまったとすれば、あるいは過度の単純化のそしりはまぬがれないかもしれない。しかしながら、それらの主張のおのおのがどのようなまわり道をへることによつてとなえられているにしても、少なくともその結論においてはおおよその点で一致しているとわたしにはおもわれるのである。た

たとえば「疎外」ということをかたるのに、人間一般の疎外ではなくして、市民社会における人間の疎外が問題なのだ、といつてみたところで、わたしにはそれほど大差があるとはかんがえられない。（この理由についてはのちほど触れる。）

わたしは従来、マルクスの思想に接近するのに、このような態度をもつてすることにたいしていろいろの疑惑を感じていた。いわゆる哲学者としてのマルクスが市民社会に生きる人間を「疎外された人間」という視角においてとらえ、かつその克服のために熱烈な使命感をもつたことがほんとうであるにしても、このことがそれじたいで、いつたいどれほどの意味をもつものであろうか？ 故意に抽象的にとりあげられた、それら使命感にどんな意味があるのだろうか？ このような意味においてならマルクス以外のおおくの哲学者と呼ばれるひとびと、たとえばニーチェも、ハイデガーも、あるいはその他これに類するひとびとも、どちらかといえばかなり類似した視角から「人間」をとらえ、おなじくそれぞれなりに文明批評などをくわだてている。だが、そうだとすればマルクスが、かれらとひきくらべてどれほどすぐれた点を、かれらを決定的に抜きこむような点をしめすことができるのであろうか？<sup>3</sup> つぎに、マルクスがこのような使命感をもち、背後にあるこのような使命感からして科学的<sup>1</sup>労作のかずかずをものにしたのであれば、かれは科学者としてはわるい科学者であつたことになる。なぜかといえば、もしかれがもつばらそのような使命感にでて科学にたちむかつたのだとすれば、当然のことながら、かれは、事実の観察の途上において、また体系的記述の途上において、あるがままの事態をゆがめこそすれ、反対にかたよりのない研究などできるはずはないからである。<sup>4</sup> かれの諸<sup>5</sup>労作は科学的ではないのだろうか？

ところでさらにここにもうひとつの立場がでてくる。マルクスを上述のような仕方で見るとは、まずはヒューマニスト・マルクスを、つい

で散文的素材に没入したマルクスを、見いだすので、おおくのばあい、初期のマルクスを後期のマルクスからきりはなして論じることをよぎなくされている。<sup>6</sup> いや、ましなばあい、要するにマルクスのうちになんらかの連続性を見ようといったところみがおこなわれるばあい、そのようなひとびとは奇妙なことに、ほんとうの、しかし秘められたマルクスを、主著の脚註や付随的発言のうちにもとめるはめにおいやられている。<sup>7</sup> だが、一個の真剣な思想家とその生涯の思索のあゆみが問題だというのなら、そもそもこんなことがゆるさるべき正当な手つづきといえるだろうか？ かりに後期のマルクスが老化し、かつ初期のマルクスが真にたっししいものを提供していたというのがほんとうだと仮定してみても、そんなことはゆるさるべきことではあるまい。真の思想家のばあいなら、もし老化がおこつたとすれば、その萌芽はすでに初期にいずれかのかたちで存在していたはずであつて、したがつて、まじめな研究者なら、この正当なものを救出するためだけにでもそれを後期において抹消させた原因を徹底的に洗ひだし、それらと正当なものとの区別しつつ展開すべきである。またあとのばあい、すなわちマルクスがみずからの思想を本文においてでなく、むしろ脚註や付随的発言のなかでおりに触れてかたつていうのも、奇怪なはなしである。思想と表現というものは、その性質からして、こんな愚にもつかない芸当はやつてのけられない。むろん自己の思索を外的な事情などのために、婉曲ないいまわしでしか述べられないといったことはありうるだろうけれど、思想家の語句というものは思想それじたいであり、思想の内的必然性といったものである。現実にえがきだされた思想の背後に、もうひとりの真実な思想家がいて、これがおりに触れて脚註のなかで発言したりすることなど、よほどのとんまでなければ信じられまい。まだ疑問はある。だがこれらはこのぐらゐにしておこう。

それはそうと、わたしとてもまた、もつばら自己自身から疎外され、類

から疎外されてしまった人間の記述に専念するとともに、他方でそれからの人間の回復を、克服をねがったマルクスがいるとすれば、そういうマルクスに抗しがたい魅力を感じるし、この「思想家」マルクスをとりあげてみたいという衝動にもかられる。そして実際わたしは、文脈から切断してごく抽象的にとりあげられたかの「疎外された労働」<sup>8</sup>のなかのいくつかの人間記述につよい実感を感じてもいる。われわれの活動が自己目的ではなくて、むしろ生活手段に堕していること、われわれの活動の結果たる世界がわれわれの意図と活動とをうらぎつて、われわれに圧殺的にはたらく強力になりあがっていること、われわれのだれもがともすればわれわれをぐめる世界や他人からひきはなされ、孤独となつていること、確固たる目標ひとつあたえられず、それにかえるに、そして孤独感と生活の疲れとをいやすために、もつぱら刹那的快樂を追求することをよぎなくされていること等々、これらこそがわれわれの肉体的・精神的現実であり、体験であるのではないだろうか？ またさればこそこれらからの解放を、それらの克服をわれわれはねがうのではあるまいか？ これらのいつさいにわれわれはただちに実感をもつことができる。だが、安易におぼれることのできる実感にはなканずく注意が肝要だ。というのは、実感というものは、まさしくそれが実感であればこそ、かえつて嘘にすぎないということもありうるのだから。

そして事実、もしもマルクスが人間疎外の現象学とでもいうべきこれらのものにその関心の焦点をあわせ、その道徳的憤慨と目的意識とをもつて——ヘーゲル流にいえば——<sup>ウンミッテルバル レフレクツイオン</sup>直接的反省として、その克服を夢見たとすれば、たとえかれがその仕事をどれほど委曲を尽してやりおおせたにしても、かれはずんぶんあわれな奴だつたにちがいない。かれがどれほどまで科学的ペダントリーの細微を尽した装いをこらしたにしても、かれの知恵のすべては結局、灰色でいろどられた画面とこれを一瞬輝かせ

るかにみえる気のきいた警句とで、したがって感傷で味つけされた気のぬけたシニシズムで尽きていたに相違ないからである。しかしながら、マルクスの功績<sup>メリット</sup>をこんなにみみつちい点にもとめることがはたしてゆるされることだろうか？ かれの本来のめんもくはもつと別の点にもとめられてしかるべきではないか？ が、そうだとすれば、例の「思想家」マルクスの証明にさいしていいあわせたようにつねにひきあい<sup>9</sup>にだされてきたかの『疎外された労働』とこれを一部としてふくむ『経済学＝哲学手稿』を、そしておしなべて（一八四〇年代の）いわゆる初期のマルクスを、そうした見地とはまつた別個の見地から見なおさなければなるまい。一般にわれわれは初期のマルクスをどうとりあつかつたらよいのか？

---

以上においてわたしがこの論文においてとりあげようとする諸問題の輪郭が明らかにされた。それは、おおずかみない方をすれば、初期のマルクスの思想的発展をただしく追求し、そこにおいて『疎外』としてかんがえられていたものの真意を明らかにするとともに、他面においてマルクスを『疎外』の観点から解釈することに反論することである、といつてよいだろう。だが、それはともかくとして、われわれはここで、この論文がいかなる方向と順序において執筆されてゆくかにかんして簡単な指摘をあたえておこう。というのも、そのことによつて、今後において書きつづけられる部分をもふくめて全体へのおおよその見通しがえられるからである。この論文は、全体としては、三つのまとまつた論文からなる予定である。最初の論文は、マルクスの思想の発展においてあたかも一時期の終結を告げるとともに、新時期にむかつての第一歩を画している『ドイツ・イデオロギー』<sup>10</sup>をとりあげて、それがどのような視点と構造とによつて支えられているかを、現在提起された問題にとつて必要な範囲で論じる。<sup>11</sup>これがわれわれがマルクスを解釈してゆくさいにとろうとしている積極的な立場で

ある。つぎに第二の論文においてわれわれは、われわれの本来の関心をなしている『経済学＝哲学手稿』が提起する諸問題を取りあげる。要するにわれわれは、その過渡的意義ゆえに登場せざるをえなかつた分裂的性格と、そこで『人間疎外』『類的本質』などが演じている独自の役割とを解明するのである。そして最後に締めくくりの論文において、われわれはマルクスを疎外の観点から解釈する人々がいかにかの分裂的性格を悪用しているかを具体的実例について批判的に検討し、あわせてそうした立場が一方ではそれら人々にとって、みずからの俗物根性の正当化のための貴重な武器となつていること、他方ではそれがマルクス主義の真の理解と実践とをばむ障壁を準備していることを、おなじく具体的に指摘するつもりである。

1. マルクスをこの方向から解釈する先駆をきつたものは、おそらくカール・レーヴィットの『ウェーバーとマルクス』《Karl Löwith: Max Weber und Karl Marx, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 67 1932》（邦訳、弘文堂）であろう。そしてそれ以後において、この見解はわが国をもふくめて今日にいたるまで、そのつどさまさまの微妙なニューアンスの差異をともしないつつくりかえし出現している。なかんずく戦後のわが国においてはある種の哲学者（主として反マルクシスト）の手になるマルクス研究はもっぱらこの視点をめぐつてうごいている、といつても過言にはならないほどである。
2. たとえば城塚登はつぎのように書いている、『しかしマルクスの場合、すでに見たように人間の自己疎外克服という基本線はすでに明確に設定されていたのであり、彼の唯物史観も経済学研究も、その基本線のうえに建設されたものにほかならなかつたのである。ところが、マルクスの思想を受けついだおおくのひとびとは、いわば「出来上つた」唯物史観や経済学のみを受けとつて、その背後にある「現実的人間学」、人間疎外克服という基本線を受けとらなかつた。』（城塚登、『フオイエルバッハ』勁草書房、139 ページ）マルクスの思想から「現実的人間学」という基本線をうけついだ少数のひとびとのひとりである城塚が、マルクスにたいして現実どんなにすぐれた理解をしてくれて、いるかについては、締めくくりの論文において詳しく見るであろう。
3. この意味において《Karl Löwith: Von Hegel zu Nietzsche, Stuttgart 1953》はひじょうに教訓的な実例をしめしている。レーヴィットはおそらく

もつとも徹底したかたちで、マルクスを上述のような角度から解釈しようとするから、マルクスの思想の現実のメリットが理解できなくなる。いな、かれはマルクスを現実の業績において同時代の他の哲学者（たとえばシュティルナーなど）から区別できなくなる。そこでかれはいろいろの思想家を同一の平面のうえに横にならべたて、だれがどのような主題を、どんな方向からながめ、どんな診断をくだしたかと、つぎつぎに列挙するよりほかに、いつぼたりとも前進できなくなる。

4. 城塚登はこれとはちがつた意見をもち、マルクスがそうした使命感をもつたところに、かれの労作を科学たらしめた点を見ている。
5. マンフレッド 《Manfred Friedrich, Philosophie und Ökonomie beim jungen Marx, Berlin 1960》は、マルクスがヘーゲルなどにゆらいするそうした使命感をもっているという理由で、かれの科学を形而上学として指摘しようところみる。
6. たとえば淡野安太郎の著作、すなわちときおり自己弁護的な意見をさしはむだけであとは恣意的な翻訳からできている『初期のマルクス』は一貫してこの姿勢でつらぬかれている。
7. 『このこと（マルクスの基本的立場）は、マルクスの経済学的研究の完成としての『資本論』ないし『政治経済学批判』において表面から隠され、附随的な議論や註で触れられるのみなので、往々みのがされている…』城塚登、『社会主義思想の成立』（弘文堂）102 ページ。
8. 《Die entfremdete Arbeit》, Marx/Engels, Kleine ökonomische Schriften, Berlin 1955, S. 96 ff.
9. この著作は 1832 年にはじめて 《Karl Marx/Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Bd. 3. Berlin》で公開された。これは現在ではいちじるしく入手困難であるが、さいわい現在東独で出版されている《Bücherei des Marxismus-Leninismus》の 41, 42 巻に二つの部分にわけられ収められているので、容易に手に入れることができる。
10. 《Karl Marx-Friedrich Engels, Die deutsche Ideologie. 1845-6》これは現在東独のディーツ書店で刊行中の「マルクス・エンゲルス著作集」(Marx Engels Werke, Dietz Verlag, Berlin) の第 3 巻に全文が収められている（以下、この論文において『ドイツ・イデオロギー』から引用がなされるとき、それはすべてこの版によつている。）

周知のように 1840 年代の後半の時期はマルクスの思索の発展においては、真の意味でのマルクス主義の確立の時期として、おどろくべき多産な飛躍的發展期を画



している。この時期はマルクスの労作でいえば『ユダヤ人問題によせて』『ヘーゲル法哲学批判——序説』(1843—44年)にはじまり、1848年1月の『共産党宣言』の執筆をもつていちおう終結を見ている。つまりここにおいて、この数年間に徐々に成熟してきたものが、すでに完成し簡潔な定式となつた透明な結晶<sup>クリスタリゼーション</sup>体としてくつきりと姿をあらわす。が、この数年間の時期も、これを詳細に見れば、そこにはかなり克明に区別をゆるすようないくつかの段階が見いだされる。むしろ発展過程のうえに区別をもうけるということは、まったく相対的な作業であつて、基準のとり方によつてはいろいろとことなつた区分も可能であるかもしれない。しかしながら、他の可能性を度外視して、これをもつば史的唯物論の基本命題にかんしてかんがえて、きつぱり区別されるのである。史的唯物論の基本命題とは何か。それは、のちのいわゆる『現実の土台』<sup>デー・ソア・レ・バース</sup>(Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie, Vorwort. S. 8. M-E. Werke Bd. 13. Berlin 1961)にかんする命題、つまり生産力とこれに照応する生産関係にかんする、それである。そこで基準はこういうことになる。マルクスはいつたいつから生産力というものを自覚するようになり、歴史的・社会的諸関係を考察するのに、その根拠にそれを見るようになつたか、と。換言すれば、社会、つまり人間の諸関係の特定の形式を規定するさいに、いつからその規定的契機としての生産手段の問題を自覺的に前景におしだすにいたつたか、と。われわれがこの基準をもつて当の時期にむかうと、さしあたり実に明確に二つの段階が区別されうる。すなわち『ドイツ・イデオロギー』の前期と後期とである。おおざっぱに言えば、これ以前においては、生産ということが問題にされるさいに、それにあずかる主体的契機(労働)とその形式規定的契機(生産力)との関連が明白につかまれていない。ところが以後になると事情は一変する。すなわち生産力に独自の重要な意義が歸され、考察の中心的地位を占めるようになるのである。したがつて『ドイツ・イデオロギー』はこの両時期の結接点<sup>クノッテンpunkt</sup>をなすといつてよいだろう。

11. 論文の表題において示唆されているように、ここで問題にされるのは主としてマルクスにあらわれるかの『人間疎外』の問題はいかに処理されるべきかという点である。が、もしそうだとすると、マルクスがエクспリシットに『疎外』を論じている『経済学＝哲学手稿』を直接中心にして考察をすすめないことが、何か奇異な印象をあたえるかもしれない。しかしわたしが、直接に『経・哲稿』にはいらないで、『ドイツ・イデオロギー』から主題に接近したのは、後代のものから前代のものを見なおしてはじめて、前代のものの意味が解明できるという信念に根ざしている。あるときマルクスはつぎのようにかたつた。『ブルジョワ社会は、もつとも発展し、もつとも多面的となつた歴史的な生産組織がある。だからそのいろいろの関係をあらわすカテゴリー、つまりその個々の

構成部分を理解することは、同時に、すでに没落してしまつたもろもろの社会の諸形態の構成部分や生産関係を見通すことをも可能にしてくれる。なにしろブルジョワ社会はそれらの残骸と諸要素とから構築されたものであるし、そこにはそれらのなかでなお克服されていないような遺物が部分的に尾をひいているし、またせいぜい萌芽にとどまつていたようなものは、発達して、完成した意義までたかめられている、といったわけだからである。人間の解剖は猿の解剖への鍵である。これに反して、より低級な種の動物のうちに存するより高級なものへの萌芽は、高級なものがすでに知られているときにかぎつて、理解されるのである。ブルジョワ経済はかくて古代経済等々への鍵を手わたすのである。』(Marx-Engels Werke, Bd. 13, S. 636) 思想の発展にかんしても、これとおなじことをいうことができるであろう。なかんずく、マルクスのばあいのように、発展の後段階が、前段階をいつぽいつぽのりこえた必然的な成果として実現しているときには、そうである。

## 二 「ドイツ・イデオロギー」にあらわれた 一般的史観

『ドイツ・イデオロギー<sup>1</sup>』のような種類の著作を、この表題が暗示しているような意味において理解することはかなりの困難をとまなうことは疑いない。というのも、この著作は、さまざまな異なれる目的を内容とする諸章からなつているにしても、「史観」といつたものをそれだけうきぼりにして抽象的に論じるようなことはいつさいしておらず、むしろそれを具体的素材と渾然一体をなした事態の運動としてえがいているからである。それゆえ、もしわれわれがこれをそのようなものとしてとりだそうとおもうなら、ある種の遊離化の手続きをとらなければならない。われわれは理解の便宜をかんがえて、これを三つの側面にわたつておこなつた。最初の側面は、もつともおおく誤解をうけている『ドイツ・イデオロギー』における人間観にかんしてであるが、われわれはこれを歴史におけるいわば絶対的軸として照明することにした。これは、マルクスの史観がどこまでも唯

物史観たらざるをえず、したがって人間の歴史的運動がその経済活動の領域においてもとめられるべきだ、という必然性をあきらかにするからである。つぎに第二の側面はこの活動が具体的歴史運動のなかでどのような形態をまとつてはこばれてゆくかを論じる。つまり人間が歴史世界のなかにくずもれて活動するときに、この世界が人間にたいしてどのような意義をもつようになるとマルクスが見ていたかを論じるのである。最後の側面は、うえの二つの側面からの帰結で、マルクスが一般的には人間の(理論)意識の役割をどのようなものとしてながめていたかを、また特殊的には、自己の理論を人間活動のどのような関連に定位し、かつそれを実践の理論ないし理論の実践たらしめようとしていたかを、指摘する。それはともかく、われわれはさしあたりここでは紙面のつごうからこれら諸側面のうち第一の側面のみをとりあげ、以下次号で第二・三の側面を論じるであらう。

1. 『ドイツ・イデオロギー』はマルクスとエンゲルスとの共著である。ことに全体の序論的部分で、しかもかれらの見解を積極的に述べた『フオイエルバッハ、——唯物論的見地と観念論見地との対立』は、おおくエンゲルスの手になり、これにマルクスが書きいれをすることによつて成立している。が、わたしは、この著作をいまはすべてマルクスのものとしてあつかつた。マルクスじしんこれをみずからの見地としている以上、あながち不当なことではないだろう。

---

## 歴史の絶対的軸としての人間

周知のように、『ドイツ・イデオロギー』は、その全体から見れば、ドイツ固有の歴史的地盤とそのうえに簇生した独特の倒錯した意識「イデオロギー」とにたいする仮借のない批判的対決の書である。それは結局日の目

を見ずにおわつたものであるが、一八四八年の三月革命の前夜に、現実の諸問題にプチ・ブル的モラルをたずさえてたちむかうかの独特の知識人的態度の批判精算という実践的要請にこたえて、徹底的なかたちで執筆されたものである。それが主として衝いている点は、ドイツの知識人（バウアー、シュティルナー、グリューン等々）たちが、いかにも高尚ぶつた全世界史的使命感に、お上品な空文句に酔いながら、結局のところ小心翼翼とみずからの無力さを何とか弁護し、正当化しようと躍起になつていること、またかれらの主張がどれほどコスモポリタンの要請をかかげてたちあらわれていようとも、それはきつすいのドイツ的偏狭性の所産でしかないこと、こうした諸点であつた。しかし、この書はその目標がこれらの諸点を完膚ないまでにあばくことにあつたにせよ、マルクスとエンゲルスとにとつては、それと密接にからみあいながらも、なおそれとは独立した別の現実的意義をもつていたのであつた。それは、かれらがなおみずからのうちのこしていた観念論的残滓、『哲学的良心』を精算し、払拭しようとしたことを度外視するならば、少なくとも批判がよつてたつ適確な基準を、ひいてはかれらの<sup>ポジティブ</sup>積極的な見地がそれにそつて適切に展開されうる十全な地盤を確立しておくこと、これであつた。バウアー、シュティルナー等々にたいする批判的対決は、これら課題を徹底的にはたす機会を提供したのであつた。<sup>1</sup>この書においてはこれが二重の構造をもつてはたされている。すなわち一方においてかれらの見地そのものを展開し、具体化し、雄大な思想にまでたかめることによつて。そして他方で展開されたものを実際に論争というかたちで駆使してみて、それらが現実にもつ射程を測定することによつて。

この前者が主としておこなわれているのは、この著作全体の序論的部分をなしている『フオイエルバッハ』<sup>2</sup>においてであるが、そこでマルクスの積極的見地が雄大な規模で比較的純粹に展開されている。しかしながらこの展開は、マルクスの以後のどの著述にも見られない興味深い特色をおびて

いるのである。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』の執筆に先立つ時期にすでにかなり明晰な自覚をもつて独自の理論的確認と帰結とに到達していた。が、かれはここにおいてその帰結の主要なものをもういちどあらためて確認的に再表現し、これにもとづいて展開すべき事態を修整するのである。換言すれば、展開すべきものをそのつど基本的見地まで還元し、そこからあらためていつばいつばと前進をはかるのである。そこには、たんに相手を説得しようという意図からでなく、むしろ未知のもののなかをかきわけてすすもうとすることからおこる、あの手さぐりとくどいまでの反復が見いだされる。もつともそのために、この著作の部分はマルクスの思索を根底から理解するのになかんずく好個の素材を提供する。というのもそれは、マルクスがあらゆる事態をどんな角度で見なおそうと骨をおつたかを、もつとも見やすいかたちでつたえてくれるからである。

ここで展開される見地はいうまでもなく、史的唯物論、つまり歴史の本質にかんする—おそらく唯一の正当な—唯物論的解釈である。マルクスはここで自己確認というかたちでは最終的に表現をあたえたのである。<sup>3</sup> 史的唯物論とは、もしこれを人間の歴史にかんして適用するなら、人間をうちにふくむ物質的対象的世界とその諸関係とを『感性的な人間活動』<sup>4</sup>として、またひるがえつて人間それじしんをどこまでもこの唯物論的客体の成果として、歴史的に把握する見地である、ということができであろう。われわれは史的唯物論というときに、マルクスが『経済学批判』の序文においてあたえたかの有名なテーゼをただちにおもいおこすのをつねとするが、<sup>5</sup> このテーゼすら実際には、この見地を了解してこそはじめて理解もされ、正当化もされうるのである。

マルクスはみずからの史観にのつとつた具体的歴史を大々的な規模で記述するのに先立つて、歴史を創る主体たる人間と人間の生活、もしくはこれに生活を可能ならしめる生活手段ないし一般的な物的対象にたいして、

あらためて反省的考察をめぐらしている<sup>6</sup>。そして現在におけるわれわれの眼目はまさしくこの点に存しているのである。さて、かれはさしあたり人間を自然史の一部、いわば自然の所産としてとりだしてくる。つまり人間は、自然の所産として、一定の身体的機構をもち、それにしたがって所与の自然を自己の欲求の、素質の、等々の対象にせざるをえないような生活の主体、要するに所与の自然を生活手段にする主体である、というのである<sup>7</sup>。だが、なぜあらためてこのような確認がなされたのか。人間とそれをめぐる諸対象のもつ意義を全面的に再吟味せんがためにほかならないのである。かれによるところである。人間はさまざまな自然的・物的客体を生活手段にしながら、それぞれなりの生活をいとなんでいるのであるが、しかしもし人間が、潜在的にせよ、顕在的にせよ、それらを手段となしうる何らかの素質ないし能力を、あるいは欲求を、みずからのうちに具備していなかつたとすれば、かれはそれらを手段となしえたはずはないし、また反対にもし自然が自然としての人間のうちにそれじたいが手段とされうる素質を創造していなかつたとすれば、かれの手段となることもなかつたはずである。通例にあつては、ある主体とこれにあたえられる客体とは相互に偶然的な関係においてかんがえられて、それらのあいだに必然的で緊密な関係が見られるようなことはない。ところがマルクスは、上述のように究極的には客体（自然）のがわに<sup>ブリオリテート</sup>8 規定的優位性をみとめたのではあつたけれど、主体と客体とのあいだにコレスポンドンスを見、それら両者を相補の関係において統一的に把握したのであつた。このばあいにかぎつてのみ、主体は対象的現実において、ひるがえつて対象的現実<sup>9</sup>は人間主体において、把握されることが可能となつてくる。すなわち人間がある客体を自己の手段的对象にしているとすれば、この対象たるやかれにとつてはかれの欲求、かれの素質が対象的に現象した形<sup>ゲシュタルト</sup>態、その投映された姿にほかならない。また反対に人間はある所与の客体のうちに自己の欲求等々を投映し、それ

を手段にしているのだから、かれとはとりもなおさず、この対象が映しだしているものの何たるかにほかならないのである。それはそうと、対象、生活手段がこのように把捉されていることから明らかなように、マルクスにあつてはそれらは狭義での生活手段、すなわちたんなる肉体的生命の再生産のための諸手段ではありえない。むしろそれは、人間のあらゆる諸能力が、そこに表明されて実現を見るところの諸手段、人間の何たるかを外面にあらわにしているところの諸対象<sup>10</sup>なのである。この点にたいする理解を欠くなら、マルクスが歴史をかんがえるのに、なにゆえに物質的生産過程をその全基礎にすえたかの、したがってなぜ唯物史観に立つたかの理解がつかなくなるであろう。

ところで、人間および対象がこのようなものとして把握されたとき、つぎに生産という事実を全意義においてかんがえることが必然的な要請となるであろう。けだし、いま問題となつている人間は静止して動かない固定的「人間」ではなく、現実の生活過程においてある人間だからであり、対象もまた抽象的に不動のまま釘づけにされてしまった客体ではないからである。いうまでもなく、人間はその未開な原始的な姿においては、人間の手の何ら加えられていないむき出しの自然を眼前にして出発し、そこにみずからの生活手段を見いだしたに相違ない。かれはそれらがゆるす範囲で生活し、それに対応する欲求をもつていたにちがいない。しかしながらむき出しの自然たるや、それじたいとして見るならば、最初から人間の欲求にいずれの意味でもびつたり適合する形式で存在しているわけのものではありえない。例外的存在を別にすれば、それは、欲求の実現の可能性をあたえても、現実性はあたえないといつたしろものであろうし、それどころか人間に圧殺的にすらはたらきかねまじきしろものであろう。だが、そうだとすれば、かれは、たんに生命をつなぐというこの理由からだけでも客体にたいして多少なりとも能動的にはたらきかけて、これをみずからの欲

求に見あうものに改変しなければならないであろう。かれは労働し、生産活動をいとなむ、というわけだ。<sup>11</sup> この結果どういうことがおこるか。まず客体の面でいえば、客体は、そのつどの対象的現実<sup>11</sup>に制約された範囲においてでしかないとしても、とにかく人間の主体性の、労働の対象化、それが対象的形式で外的に定着した姿になつたのである。それは、人間の主体性で貫徹せられて、そのようなものとしてかれの生活手段になることになつたのである。つぎに人間そのものにかんしていえば、この生産活動という過程は二重の意味で、人間能力の再生産、その創造的育成という意義を担っている。第一に生産の過程において、生産とはその過程で見れば、物的対象の客体性そのものにじかにぶつかりながら合目的々に人間の主体性を実現する作業である。その客体性を解放して、それにしたがうのであれば、いかなる生産行為も可能ではない。したがつてそれは対象における新しい可能性の発見にわかちがたくむすびついているのである。だが、この発見たるや新しい欲求の開発であり、人間の可能的本質の新しい育成である。第二に成果としての生産物において、人間は目前の所与のうちに自己の欲求を見いだす主体と規定されていたが、もしそうだとすれば、人間の生産活動による所与的現実の変更はとりもなおさず、人間の欲求の変更それじたいを意味しなければならない。かれはみずからの生産物においてみずからの欲求を再生産し、本質を変更する主体なのである。<sup>12</sup>

マルクスにとつては、歴史とはひとつの意味においては、人間がみずからの労働を介して不断に所与の物的自然を主体化し、変更し、ひるがえつてみずからの本質的能力を漸次的にゆたかではばのひろいものに現実に変更してきた過程を意味している。対象とはかれの能力に照応する、というより能力とは対象に照応するのだから、対象がはばひろいゆたかなものになることは、とりもなおさず少なくとも潜在的には、かれにこれに対応する多様な創造能力と享受能力との展開を保証することであつた。そしてマルク



スが歴史の現実の土台を産業と商業の歴史のうちに指摘したとすれば<sup>13</sup>、それは人間の可能性を外的に実現している諸対象とその運動とが、主として人間の活動のこの分野で生産されているからにほかならない。またそれらのそれぞれ独自の形態を人間本質の規定的要因と見たのも、おなじ理由からにほかならない。

それはそうと、われわれはこれまで生産の過程とその意義とを何か個人的な過程でもあるかのようなかたちで考察してきた。しかし、実際においては、それは、個人的な過程を排除しないことがもちろんであるとしても、それにとどまるものではなく、むしろ時間的にも空間的にもひじょうな広がりをもった、いわば連鎖的過程なのである。そしてそうなる必然性は、人間がその生活々動において、いずれのものにせよ対象的活動をいとなむというこの事実のうちに基礎づけられているのである。個人は、それじたい他の諸個人の所産であるということを度外視すれば、むしろのこいつでも自分自身から出発し、それぞれ固有の欲求をもちながら対象的な活動にたちむかう。このかぎりでは、個人とはあるいは偶然的で無前提な存在であるといつてもよいかもしれない<sup>14</sup>。しかしながら、かれがひとたび現実に対象的な活動—そして個人はこの特殊な活動以外の何ものでもない—にはいつたとしたら、すでにかれはその活動においてただちに他人との協力関係を、共同的生産関係を、むすばねばならない。それが直接的協力関係というかたちでおこなわれないばあいにも、そうなのである。すなわち、かれはすでに他人の手を介して生産せられた対象を自己にたいする対象としてうけとめなければならないからである。かれには、ほとんど稀有な例外（直接的自然）を別にすれば、他人の生産物、他人の活動が生き生きと息きずいている対象があたえられるのだ。たんなる一定の空気の振動を聞きとることすらが、すでにその一ケースなのだ。かれが感じる欲求もまた、他人の一定の生産物にたいする、もしくはその欠如ゆえの、欲求

でしかない。<sup>15</sup>そしてかれが、このあたえられた対象に否定的にふるまおうと、肯定的にふるまおうと、その事情に何らの相違も生じないのである。だが、もしそうだとすれば、かれはよしんばどれほどまでに個性的に登場していようとも、かれのなかには最初から他人の活動が、他人の個性の対象化たる生産物がすみずみまで脈打っているのである。かれが自己の活動の対象を対象的形式で外部からうけとるという理由で、かれは共同体的な性格でなければならないからである。ところでこのおなじことはまた、逆のばあいにかんしてもいえる。かれが自己の活動の諸対象を外的にうけとつて、これを介して何かあらたな創造的な生産をいとなんだとしよう。このばあいにも、このかれの生産物たるやふたび独立の外的形態を付与されて、他人のための現実的出発点を、いわば他人のあらたな生活の土台を形成しなければならない。諸個人は、そのつど対象にたいして肯定的もしくは否定的に関係しようと、ともかくかれらの活動の客体的実現たる諸対象を直接・間接の媒介にして、相互にむすびあっているからである。そしてこの対象のうけわたしの運動がいずれかの理由で一瞬たりとも途絶えたとすれば、諸個人はおそろしく貧弱となるか、あるいはその現存をすらやめるであろう。<sup>16</sup>かれらは不断に活動し、創造し、かつこの創造の産物の流動が継続的に維持されているこのかぎりにも、その流れのなかに、そしてそのよどみのなかにかれらの生命を見いだしているのである。<sup>17</sup>

さて、このような面からしていまや社会や歴史をかんがえてゆくとすれば、どういうことになるであろうか。それらは何よりもまず富の生産と配分の運動の経過であり、これらを介して、『諸個人が……肉体的かつ精神的におたがいをつくりあう』経過である、<sup>18</sup>ということができるであろう。従来の歴史において、そして社会において、ひとびとはあたえられた生産条件から出発し、それらをかれらの活動をとおして徐々に変更し、この変更の所産を一世代からつぎの世代へとうけわたしてきた。そしてこの世代は

またうけついだものをさらにいつそう発展せしめて、つぎの世代へとうけわたしてきたのである。この生産物のうけわたしの諸継起や、それにとともなう人間の本性の漸次的豊富化の過程こそ歴史なのである。<sup>19</sup>それはさまざまな側面をふくんでいる。諸対象が生産物という形式をとる以上、それはまたさまざまな独特の所有形式というかたちで実現する。だから事態をこの面で見れば、歴史とは富の独自の配分様式と所有様式の継起とかがえてもよからう。そしてこの事態は権利とか<sup>レヒト</sup>法律とか<sup>ゲゼッツ</sup>いうかたちで自己を表現してきたのであつた。ところで他方富の生産がゆたかになればなるほど、それに見あつた富の流動のゆたかさもあたえられねばならない。つまり流動を保証する関係もともにあたえられねばならないのである。従来の歴史はこの面から見れば、交通の充実化の歴史であり、人間どうしの富をめぐつての諸関係の複雑化の歴史でもあつた。世界史は富の生産が充実化するに応じて、それを運動せしめるに十分な関係をも保証した。そしてこの保証が不十分なときには、暴力をもつて調和をはかつてきたのであつた。今日にあつては世界市場というかたちで、遂に世界のあらゆる部分が統一的な機能的関係にはいるにいたつたのである。まださまざまな面がある。しかしこの程度にとどめよう。

さて、マルクスの史観を「経済史観」<sup>20</sup>と名づける一群のひとびとがいる。事実マルクスは人間の成立と活動とを、その対象的活動のうちに見いだし、この活動がもつとも一般的には、人間の経済生活—富の生産と分配—の諸形式において実現すると確信していた。いいかえれば、人間が対象的活動をいとなむかぎり、経済生活をいとなまざるをえず、この経済基盤こそ全歴史の基盤をなすと見たのであつた。したがつてマルクスは人間の本性をかがえぬくことによつて、ここに到達したのである。われわれはそれゆゑこの点を十分考慮するならば、マルクス主義を、「経済史観」と名づけたとしても、あながち不当とはならないであろう。けだしマルクスにあつては

経済上の諸カテゴリーはとりもなおさず人間の定在の形式、現存の諸規定だつたからである。<sup>21</sup>しかしながら、もしわれわれが「経済」という言葉のもつ通常的な意味から、それを解したとすれば、この用語はゆるされがたい一面化と倭少化とをふくむことになる。たとえば人間が経済的利害を追求することによつて客観的・機械的に歴史をつくる、とこんなぐあいに歴史解釈がおこなわれたとすれば、それはマルクス主義の極度の抽象化であり、歪曲である。むしろマルクス主義からすれば利害追求のこの感情こそ逆に、独特の对象的富の生産と分配の構造から解明さるべき当のものなのだ。

それはそうと、われわれはマルクスにおける独自の対象観と人間観とから、かれの歴史（社会）観のひとつの側面をざつと素描してきたのであつたが、これが『ドイツ・イデオロギー』における歴史観だと述べたなら、あるいは不審にもみえるかもしれない。そして当然である。というのも、そこにあつてはすでに歴史の具体的な現実的経過の記述が見いだされるのみで、このような「史観」は見いだされないからである。つぎにこれまで述べたところでは歴史・社会の過程はもつぱら客体の人間化の過程として、また人間化された客体のうけわたしの過程として、いわば無抵抗で直線的にえがかれたのであるが、『ドイツ・イデオロギー』においては抵抗のおおいい波乱にとんだ現実が問題なのだから、まさしく矛盾こそが中心にたつてゐる。これはどのような事情にあるのか、実際にいえば、われわれがこれまでに素描してきたものは、『ドイツ・イデオロギー』においてその<sup>ネガティブ</sup>否定的な表現が見いだされるところのものの<sup>ポジティブ</sup>肯定的な表現だつたのである。現実の歴史、すなわち『ドイツ・イデオロギー』などにおいて表現を見いだしている歴史にあつては、むろんのこと直接的にはかかる直線的な人間成立史といったものは見いだされない。というのもそれは現実の波乱にみちた多様性の背後にかくされているからである。けれども他方これら現実はその

の多様性を縫つてかかる人間成立史を徐々に醸成しているのでもある。そしてわれわれは現実の歴史におけるこうした抽象的・一般的側面、つまりそれを一貫しているいわば絶対的軸を、そのようなものとしてとりだしたのである。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』において、究極的な人間の解放としての共産主義を問題にしているが、それはかれが歴史におけるこの絶対的軸を明晰に自覚していればこそ、できたのであつた。だが、むしろのこと問題なのはこの一般性を一般性として準備する具体的特殊、規定された現実である。けだしそれをのぞいて歴史などはないのだから。それゆえわれわれは以下でこれをもつばら問題にし、それが『ドイツ・イデオロギー』でいかに処理されているかを主として方法的視角から眺めよう。ところで、あらゆる書物において、それじたいを抽象的にとりあげれば無意味であるのみならず、ばあいによつてはひどい誤解を招く危険すらはらんでいるのに、なおかつそれを理解せねば、当の書物のたどしい理解には達しがたいというようなものがあるが、上述したものは『ドイツ・イデオロギー』におけるまさしくそうしたものだつたのである。

1. 以上については 1859 年のマルクスの労作『経済学批判』への序文を見よ。Marx-Engels Werke Bd. 13, S. 10. Berlin 1861.
2. Marx-Engels Werke Bd. 3, S. 17-77.
3. これ以後の時期。たとえば『哲学の貧困』『共産党宣言』などでは史的唯物論はすでに熟知の思想として自明の前提とされ、もはや手探りなどともなわない。
4. この用語は『フオイエルバッハにかんするテーゼ』から借りたものだが、『ドイツ・イデオロギー』そのものにも見いだされる。Werke, Bd. 3, S. 5, 6, 44, 45 などを見よ。
5. Marx-Engels Werke Bd. 13, S. 8 f.
6. これについては, Werke Bd. 3, S. 21, 28 f. 37 ff. 69 f. 112. などを比較せよ。
7. Werke Bd. 3, S. 5.
8. Ebenda. S. 44. なおこの確認はなかんずく重要である。けだしこの優位性が明確化せられぬまま、主体の能動性が重視されれば、それはただちに観念史観に

通じるからである。

9. これはそのつどいろいろと表現をかえて強調せられている。同書 6 ページでは《Zusammenfallen》 同 31 ページでは《die Identität von Natur und Menschen》 同 67-8 《die den materiellen Produktionsinstrumenten entsprechenden Fehigkeiten》 同 71-72 ページでは《...Sind zu ihrer Individualität gehörige Bedingungen, nichts Äußerliches für sie》 なお Vgl. Ebenda. S. 247.
10. Vgl. hierzu. Ebenda, S. 21.
11. 実際をいえば『ドイツ・イデオロギー』においては、実体的にとらえられた「人間」つまり生産しない、労働しない、変化しない、静的な「人間」はかんがえられていない。それどころか、人間を活動として最初から動的にとらえていることが、『ドイツ・イデオロギー』における特徴、この段階を以前のそれから区別する特徴なのである。以前の段階（たとえば『経・哲稿』では、人間をまずは実体的にかんがえ、ついでその活動をかんがえるという手つづきをふむ。しかしいまは理解の便宜から、むしろ『経・哲稿』にちかい立場から問題に接近したのである。
12. この変化、現実の変化の認識こそ『ドイツ・イデオロギー』におけるポレミークのひとつの基点をなしている。この点を理解しないと主としてシュティルナーの「人間」にむけられている全議論が理解できない。 Vgl. Z. B. Werke Bd. 3, S. 232 f. S. 245 ff. S. 287 S. 422 f.
13. Ebenda. S. 28. なお『意識の生産について』の全体を見よ。Ebenda. S. 37-50
14. Vgl. hierzu Z. B. Ebenda S. 423.
15. このことが理解されなければ、たとえば同書 133 ページなどに見られるシュティルナーの《der Geist, der sich selbst aus Nichts erschafft also Nichts, das sich aus Nichts zum Geist schafft》にいとむポレミークは理解しにくい。
16. 同書 54 ページに見られるこの視角からの展開、たとえばフェニキア人にたいする言及などは、とくに興味深い。
17. 社会をこのような方向にむかつて解明する端緒をきつたのは、いうまでもなくヘーゲルであるが、しかし自覚的徹底性をもつてこの視点を前景におしだしたのはモーゼス・ヘスであつた、かれはその『貨幣の本質について』においてつぎのように書いている。《Der Verkehr der Menschen entsteht nicht etwa aus ihrem Wesen; er ist ihr wirkliches Wesen, und zwar ist er sowohl ihr theoretisches Wesen, ihr wirkliches Lebensbewußtsein, wie ihr praktisches, ihre wirkliche Lebenstätigkeit. Denken und Handeln gehen

nur aus dem Verkehr, dem Zusammenwirken der Individuen hervor. —und was wir mystisch “Geist” nennen, ist eben diese unsere Lebensluft, unsere Werkstätte, dieses Zusammenwirken.»あるいは《Ihr（個人の）wirkliches Leben besteht nur im gegenseitigen Austausch ihrer produktiven Lebenstätigkeit, nur im Zusammenwirken, nur im Zusammenhang mit dem ganzen gesellschaftlichen Körper.》（《Über das Geldwesen》 Moses Hess, Philosophische und sozialistische Schriften 1837-1850, Eine Auswahl. hrsg. und eingeleitet von A. Cornu und W. Mönke, Akademie Verlg. Berl. 1961. S. 330 f.）

18. Werke Bd. 3. 37.

19. Vgl. hierzu S. 45, Ebenda.

20. たとえばシュムペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』におけるマルクスの「経済史観」にかんする記述を見よ。J. A. Schumpeter, Kapitalismus, Sozialismus und Demokratie, I. Teil; Die Marxsche Lehre (S. 15 ff) Bern. 1946.

21. Marx-Engels Werke, Bd. 13. S. 637.

[未完]